

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 芥川龍之介 『羅生門』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 80 回のツイキャス読書会の課題図書は、芥川龍之介の『羅生門』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『羅生門』 感想文

この作品は、自分が生き伸びるためであれば犯罪を犯すことはやむを得ないかそれともやはり許されないことなのかについて、主人公の下人が葛藤している様子を描いたものだと考えた。

非常事態であれば(多少の)犯罪(悪)は許されるのか、と問う作品ではないかと考える。

老婆は蛇の肉を干魚と偽って販売していた女性についてそれは生きるためだったから仕方がないことだという。そして自分がその女性の髪を抜いていることもまた自身が生きるためだから仕方がないことだという。

下人が葛藤していたことを先行して行っていた老婆を目の当たりにして下人のそれまでの葛藤が消えたように、同じ人間であっても当初持ち合わせていた価値観は時間の経過とともに、また何かのきっかけで変わることもある。

生き延びることを選べば時に人の物を盗らざるを得ない場合もあるのだろう。半面、平時の価値観を重視・保持し続ければ結果的に命を落とすことになる場合もある。どちらが正しいのかは誰にも決められない問題だと思う。

(おわり)

## 『羅生門』感想文

善悪のテーマ。ドストエフスキーが、浮かびました。人の心理、悪い事を考えている時、善行とは言えない場面に遭遇すると自分を合理化する私を見つめます。それが(すれば、すれば)を行動に移すきっかけになっちゃいます。キリギリスが、いなくなった時、老婆はあの世。

そして、下人は、また善行とはいえない、人生を過ごすのでしょうか！

心に残ったのは、生き延びなければ。と、感じました。飢え死には、辛い事ですが、ヤミ米を拒否した裁判官(山口良忠さん)をおもいだしました。

悪事は、繰り返し行いますね。ドストエフスキー曰く

全て馴れてしまう。

(おわり)

## 右頬の面砲。

男には、行くところがない。

なぜ職を失ったかの理由は、数年来災いに見舞われた平安朝の衰微の余波だとあるが、この男にとって失職は、今晚眠る場所がなく、明日から生きてゆくための俗世での人のつながりも切れたということ。

晩秋の夕暮れ。飢え死にする決心も、盗人になる勇気もない。

降りしきる雨音を聞いて途方に暮れながら、男は着地点の見つからない感情の中を低徊していた。

羅生門の楼の上は、死者が祀られずに捨て置かれた「結界の外の世界」。

人の倫理から外れたその場所で死人から髪を盗む老婆を見たとき、男にはあらゆる悪に対する反感が芽生える。

「せねば飢死にするのだから、仕方がない」

老婆は、死人から髪を抜く行為を自分勝手な正当性で片付け、そこにしかるべき良心はない。

それを聞いた男もまた、ならば自分も飢え死にする身だという理由をかざして、男は老婆から着物を引きはがし闇へ消える。

自分よりも卑しい人間を見たとき、人はどういう行動を起こすものだろう。

己に与えられた命を慈しむことを忘れ、「生かされている」という永遠性の感覚が欠如した人間たち。

右頬の面砲は、男の良心の表れだったと思う。右手が面砲から離れたとき、盗人へのためらいも捨ててしまった。

世が世だからでは片付けられない、どの時代にも当てはまる、「あるべき良心のよろさ」に触れ、

男の末路を按じると、昨日見かけた街角での些末な小競り合いを思い出す。

人の心がどんどん濁って、浅ましい人間が増えている。

世が世なら刀が振り回され、人のものを平気で盗むのだろう。

心の中が波乱なのは、中世ではなくこの現代かもしれない。

(おわり)

## 生きてく世界

「生きていくための悪なら許される、必要悪がこの世にはある。と言う事をこの作品は言っている」と私が羅生門を学んだ高校の国語教師が言っていたのを20年近く経った今でも忘れない。

話は変わるがカンヌ映画祭で万引き家族が最高賞を受賞したのもこの読書会に合わせてかも知れないな、など思ったりする。

世の中法律も社会秩序も何もかも機能しなくなり、食べるものも底ついて、周りで人がどんどん生き絶えていく世界になった時、やはり人は生きる為に、誰のどんなものでも奪い、どんなものでも食うようになるだろうか。そうになったらヒトは人間と呼べる存在ではなくなってしまうし、それが人間社会と呼べるものではないと考える。

そうならない為に自由とは何か？生きるとは何か？死ぬとは何か？を考え、正義と呼ぶもの、悪とされるものを角度を変えて見たり、自分の生活や仕事に関わる法律を学ぶ事が重要になると考えた。

私にとってはそれが理性と言うものを育てる材料になると今回羅生門を読み返して思った。

決意を持って羅生門を降りた下人が生きていくであろう、生存競争だけに追われるような世界を私は望まない。

(おわり)

## 『羅生門』感想文

今回、羅生門を初めて読みました。

読んだのだけど、あまり意味が分からなかったなので、すぐに2回3回と繰り返し読んでみました。

まず、この主人公の下人が若いせいなのか、自分自身の心の揺れ動きが多く、餓死にするか盗人になるか気持ちの切り替わりがとて早い人物だという印象が残りました。

この羅生門のハシゴは、地獄というか悪の世界に踏み入れる装置として機能しているように感じました。

地獄で生きるためには悪事を働かなければいけない老婆の言葉を聞いて、自分も悪人となる「勇気」を得て、悪に染まる覚悟を決めて盗賊になったのだと思います。

途中、老婆の生死が、下人の脅しによって左右されていて、大岡昇平の野火の田村一等兵が塩を欲しい時に、「殺さないから騒ぐな」と現地人の男女に言ったシーンにも似てるなと感じました。

老婆は、下人に盗人になれと直接的な指示はしていないけれど、悪の影響を与えたという意味で、生きる為＝勝つためと置き換えると、今の大学のアメフト問題でも当てはまるような気がしました。

下人＝M 選手

老婆＝内田前監督

でしょうか。

不適切な例えかもしれませんが、下人も M 選手も、選択肢の無さというのは、悲惨だし可哀想だと思います。

もちろんこの羅生門の老婆も可哀想ではありますが。

今回一番刺さった文章は、9ページの「どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでいる違はない」というディストピア的なセリフと、17ページの「きっと、そうか」と悪に対して受け入れたセリフが刺さりました。

黒澤明の映画の羅生門(原作は「藪の中」らしい)も気になりました。

(おわり)

## 「迷わない鴉」

私は考えごとに集中する時に髪をさわる癖がある。

この下人も右の頬にある大きな面皔を触るのが癖だ。面皔なのでまだ若いのかもしれない。

下人の面皔がフォーカスされる度、ぐるぐると迷いながら思考する下人の心理がより鮮明に私に伝わってきた。

面皔をさわりながら下人が考えていたことは  
「盗人になるか餓死するか」という善悪に対しての迷いだ。

迷いは死人の髪を抜く老婆に出会い変化していく。

「下人の心には、或勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。この老婆を捕らえた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である」 新潮文庫 P17 引用

私は下人の中に老婆に会う前にはなかった2つの大きな心理が生まれたと考えた。

ひとつは、死人の髪を盗む老婆の着物なら同じように盗んでも罪ではないという自己肯定。  
そして2つ目は、どんな事でも生きようとする老婆の姿を見て、自分も逞しく生きようとする勇気。  
この2つだ。

下人は迷いがなくなり、面皔から手を離す。老婆の着物を盗んで下人は逃げて行く、盗人になって生きる事に決めたのだ。

羅生門の上を飛ぶ鴉は生きるために迷いなく死体を啄む。

人は迷いながら生きている。  
良心や倫理観。  
これはどこからくるのだろうか？

読書感想文を繰り返し書いているうちに私には一つの疑問が生まれてきた。

人にある良心とは、本来生まれた時から備わっているものなのだろうか？  
それとも学習して身につけるものなのだろうか？  
愛情をうける事で培われるものなのだろうか？

小説を読む度にいつもここにぶち当たる。

(おわり)

## 『自己肯定と自己正当化』

羅生門の下で雨やみを待ちながら明日からのことを迷っていた下人は、あるひとつの答えにたどり着く。「生きるためには悪を成すことも仕方がない」

ただ、このひとつの答えを自ら決断する「勇気」がでない。「勇気」つまりはその「正当性」を探していたのだ。そのため、判断保留のため今日の寝床の心配をし始める。下人は昨日まで主人のもとでまじめに勤めていた。そんな人間が急に悪へと進むことは、そうやすやすとは決断できないものである。

その事態が急変するのは、寝床にしようとして門の2階に昇った時だった。怪しい行動を取る老婆に、下人は悪への反感を抱き憎悪を燃やす。「悪に対する反感」、自分はこれまでまじめに勤め悪いことなどしてこなかったのに、なぜこんな目にあうのか、自分は悪くない、こうした想いが下人に正義の念を強くする。

だがこの正義の念は、これまでの自分の生き方を正当化してくれるかもしれないが、これから生きていかねばならない当の自分には、何の役にも立たない。

生きるために死人の髪を抜く老婆の現実的な言葉を聞き、下人はこれまでとは反対の「生きるために悪を成す」ことへの「勇気＝正当性」を得る。それは「仕方がない」と判断するのに絶好の理由だった。

下人は颯爽と駆け下りていく。だが、彼は再び迷うことはなかつただろうか。『羅生門』の題材元である『今昔物語集巻二九第十八』では、主人公は始めから最後まで「盗人」であり、しかもその本人が話の語り主である。一方『羅生門』では「下人の行方は、誰も知らない」のである。

自己肯定と自己正当化の違いは、その根拠を自分の内に持つか、外に持つかであると言える。

『今昔～』の盗人は盗人である自分を自ら語り、自ら価値付けている。一方『羅生門』の盗人は周囲に翻弄されながら、迷いの中で何とか自己正当化することで自分も他人も誤魔化し生きている。芥川のこのアレンジは、刀を捨てた明治の大和人に「私たちは一体何者なのか」と問う、内なる叫びだったのかもしれない。

(おわり)



## 『 神のおはすところ 』

この小説に触れてしまうと「罪を憎んで人を憎まず」という言葉が薄っぺらく思えてしまう。孔子や聖書(ヨハネ福音書8章)の言葉であるのにも関わらず、それが霞んでしまうほどの世界観だ。「理性」と「本能」を分けるギリギリの境界線は誰が引くのだろう？

暇を出された下人は、盗人にならなければ、羅生門に打ち棄てられている屍骸と同胞になってしまう…… と考える。ただ、下人ひとりの考えではまだ、盗人を肯定する勇気がない。それを「勇氣」といいいいものかわからない。しかし、屍骸の髪を抜く老婆に出くわしてからは、下人の「理性」は乱高下する。悪行を肯定する老婆を一瞬でも憎んだはずが、髪を抜かれる屍骸の女の悪行の話や太刀に怯える老婆を前に、悪行肯定スパイラルに入ってしまう。下人は、自己を守る「本能」寄りに人間としての境界線を引いてしまったのだ。下人のこの判断は、この劣悪な環境が悪いのだとか、命に関わるのだから仕方ないのだとか同情の余地があるかもしれない。しかし、他人を傷つけてでも自らが生き残るか、他人を傷つけるくらいなら自らが犠牲になるかの判断は、それぞれの心の内だと思うのだ。人間が他の動物と違うところは「理性」の存在だ。その人間たる「理性」があるゆえに、動物たる「本能」とのせめぎ合いで苦しむのも確かだ。

自己犠牲を選べば、餓死が待っているが、罪の呵責に苦しめられない。他人を傷つけることを選べば、命は永らえる。どう判断するかは、それぞれ育ててきた道徳心や徳義心がギョツとつまった「理性」であり、それが存在する「心」だと思う。現在、話題の日大アメフト部の悪質タックルの選手も、相手を傷つけることで試合出場を選ぶか、他人を傷つけるくらいなら試合に出なくてもいいと判断するか… そんな単純な状況ではなく追い込まれたのだと思うが、現代の羅生門のような気がしてならなかった。

そして、その心にどんな「神」がおはしているのか、どんな境界線を引いてしまうのか、その人間のみぞ知る…… ということだろう。

結局、下人は盗人として生きてゆくことを決めた。確かに、環境的に盗人をしなければ餓死するかもしれない。でも、彼の心が決めたのだ。環境ではない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

## 「下人に欠けていた勇気」

『羅生門』は、洛中(権威にささえられた社会秩序)と、洛外=猿山みたいな自然状態の境界を画している。

下人が『羅生門』で雨やみを待っていたのは、洛中の秩序にとどまるか、法を踏み越えるか(お上の秩序に反逆するか)迷っていたからだ。法にとどまれば、飢え死であり、法を越えると「すれば」……………強盗になるほかない。善良な下人は、倫理的葛藤に苦しんだ。

二階にあるのは、遺体である。身元はわかっているが引き取り手いないのが遺体だ。門外に捨てないのは、それがモノではないからだ。洛中の住人は仕方なく遺体を、ここに運んだ。

そのご遺体から、髪の毛を抜く老婆は、この女はへびを干魚と偽って、太刀帯の陣に売っていたから、その報いで、毛を抜かれても仕方ないと…言い訳した。(太刀帯の陣というのは、現代の宮内庁みたいなところだ。)

恐れ多くも、朝廷を相手に詐欺をしたのだから、そんな反逆者の死体なら、モノ同等に扱ってよい。そういう理屈で、この老婆は自分の行為の正当化をしている。

この挿話の元ネタの『今昔物語集』では、この老婆は、仕えていた主人の遺体から髪を抜いていた、とある。統治が揺らげば、失業者は、かつての主人に対して恩知らずの罪を犯さざるをえない。

下人は、老婆の弁に悟るところがあった。そして直観した。この老婆は、主人の遺体を詐欺師の死体と言いくるめている、と。

彼は、ここで、人は自分自身にも世間にも同時に嘘を付くことができることを発見した。

下人に欠けていたのは、盗人になる勇気ではなく、都合の良い言い訳を本気で信じる勇気である。

倫理的葛藤は、自己欺瞞によって解消される。人は、善良な下人のまま強盗になれるのだ。

「下人の行方は、誰も知らない」

いったい彼は、どこへ行ったのか？

たぶん。積極的な嘘で自分を騙しおえた下人は、治安の低下した洛中に戻り、勝手知ったる主人の家で、最初の盗みを働いただろう。

クビになったバイトが、腹いせに合鍵で盗みを働くような論理的帰結である。

(おわり)

今昔物語の元ネタ

[巻 31 第 31 話 太刀帯陣売魚姫語 第卅一](#)

[巻 29 第 18 話 羅城門登上層見死人盗人語 第十八](#)

[『今昔物語集』の巻 29 第 18 話 現代語訳](#)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)  
今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)